

### 破壊と救済：ベンの詩における救済的諸形象とその歴史的批判(2)

日中，鎮朗

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

95

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

67

(発行年 / Year)

1996-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004853>

## 破壊と救済

——ベン(Ben)の詩における救済的諸形象とその歴史的批判——(二)

日中鎮朗

(承 前)

(3) 自己救済の方法——海・遠方・南方・青の形象——

(a) コカイン

二〇年代まで続く「崩壊」のテーマに対してベンは混乱した現実を写すよりも現実から脱出する道を選ぶ。近代的自我の成立はまさに合理主義的世界観の成立を産出したのであるから、この密接な両者の関係から照らし出せば、近代的自我の崩壊は合理的の世界観を捨て去り、非合理に向かわざるを得ない契機ではあった。その非合理性への志向は、最終的にはナチズムへの傾斜として現われるが、表現主義の詩人として出発した当初は、シュールレアリストたちが経験した実験、即ち、コカインなどの薬物による「今・ここ」にある現実からの脱出、そうした現実のとりあえずの変容、そしてその仮の変容を詩的創造力によって永遠の、現実の変容へと位置づける過程を通った。つまり、詩のメタファー、その表現的地平における自己救済の形象としては古代性や神話に彩られた海、遠方性、南方性や青が現われるか、<sup>(19)</sup>それ以前に薬物使用を試みた時期があった。

薬物使用による現実崩壊の脱却の試みは陶酔し、高揚した自我・自己の実験的観察を通しての外的存在Ⅱ世界と

内的存在Ⅱ自我の關係の見通し、修復、再発見である。戦線において医師として薬物を患者に使用した悲惨な状況・体験の投影の看取は当然だが、むしろ薬物の自己投与に伴う自虐性をここに見るべきである。従って後年、醒めた目で見直した時、これは一つのエピソードにすぎなくなる。一九五一年一月一九日付のエルンスト・ユンガー宛の手紙でベンはこの機会に言い添えておいていいと思いますが、私自身は麻薬を現在はやっていないし、また過去にもありません（第一次大戦中のコカインに関する短いエピソードを除けば<sup>20</sup>）と述べるに至る。しかしながら、一九一六年成立の二つの詩は薬物服用によって失なわれたものの回復、本来の自我感情への道を一挙に辿ろうとしたことを示す。

「おお夜よ！ 私は既にコカインを服用した／血液には今、滲透している／髪は灰色に、年月は飛ぶように過ぎ去る／私は、私は感情の横溢のうちに／もう一度過ぎ去ったものの前で開花せねばならない／」

（『O Nacht』—53）

シュールレアリスムの自動書記的語法と流れのうちに自我感情が拡大し（「…空間排除の自我感情の沸騰だ」）、コカインの服用による「感情の横溢のうち」に歴史の中で自己位置の同定と失なわれたものの回復がはかられる。法則や脳髓化した自我と対立し、救済の場を形成する感情の拡大により脳髓Ⅱ意識からの脱却が試みられている。

「幻覚剤の麻薬は自我からの脱却と過去の記憶内容への退行をもたらす<sup>21</sup>」。

しかしコカイン服用による一時的な幻覚にすぎない自我感情の拡大は願望や要求に終わり、新しい現実たりえない。この自我の果てに予感されるもの―「脳髓においてはあまりにも深く、夢の中ではあまり狭く」がコカイン幻覚の位置関係を示す―が次の救済となるが、詩「コカイン」でさらにベンの自我の崩壊を跡づけ、その構造から論を展開していく。

「自我の崩壊を、甘美な、深く希<sup>ねが</sup>われた崩壊を／おまえは私に与えてくれる—咽喉はもうざらざらし／言われたことのない形象の聞いたことのない響きが／私の自我の下部構造で既に響いてくる／

……

飛び散った自我—、おお、飲み干された腫瘍—／吹き消された熱　　甘く爆破された防御　　／流れゆけ、おお、流れゆけ、おまえ—そして産め／腹を血塗<sup>ちまぬ</sup>にし、形なきものを」

《Kokain》52)

自我の上部構造である意識の崩壊の間隙を縫って、コカインは下部構造に未知の形象や音—「形なきもの」の生<sup>なま</sup>成をひそかに促進する。「形なきもの」は『測量主任』最終章第一幕に現われる死の形象に随伴するベン<sup>ベン</sup>の用語<sup>用語</sup>で、もうひとつの場、即ち「初源なるもの」(Das U)の前徴である。自我—意識の崩壊(「最もぶよぶよし、過ぎ去ってゆく」現実、「脳髄は戦慄することと下部構造—無意識というフロイト的図式を「母親の鞄」から生じた「剣」がそこを離れ、別の荒野に沈みこむという性的コンプレクスが補強する。自我の崩壊、感情と性の横溢<sup>横溢</sup>、解放、事物や意味のボールが剣がされ、自己の内部に存在していた太古的な「始源の層」や「初源なるもの」の必然的発見という過程がコカイン服用によって道筋をつけられたのである。

(b) 海・遠方・南方・青

「カリユアティード」も破壊(「石の呪縛から身を挽ぎ離せ、打ち砕け」「…寺院を倒壊させよ」と、血とエロス(「永遠の、陶酔を超えた／唯一度だけの大音声のどよめき渡る血から」「体を開け、自壊しつつ花開け／そしておまえの柔かな花床を大いなる傷からの血で浸せ」)で始まるが、最後に救済の道—南方性が示される。

一見よ、この夏の最後の青い吐息が／アスターの花の海の上を、遙かな／樹木色の岸べに来るさまを。明るみを／見よ、我々の南方性の／この最後の幸福　偽りの時刻が空中に高く掛かるのを—

《Karyatide》(45)

夏、青、海、岸という形象と常に有機的に関連して南方性、即ち、遠い、別の、かつて存在した、そしてペンに  
 とっては再び未来においてあり得べき世界の比喩があり、原始や古代を示す時間的距離と古代ギリシアや南方の  
 ②国を示す空間的距離の二つを含蓄する。南方性は海（出発し、辿り着くべき場として岸や島も含む）と伴に現われ  
 る。海と光の中にある島へ向かう決意をうたう「旅」では水平線を滑る眼差に「既に結合の衝動は消滅し／既に関  
 係の体系は解体される」(《Reise》43)と云われるように、海は因果律・法則主義が解体され、現実世界の諸関  
 係を混沌に帰し、新しい生を運び来る場として機能する。その新しい生は遠方に生成する。

現実崩壊・自我崩壊は新しい自己の創造と世界創造の跳躍台として捉え直されるが、ペンにおいては表層的自我  
 (上部構造)の崩壊による現代文明に抑圧されてきた深層的自我(下部構造)＝本来的自我の現出や本来的創造的  
 場の回復という退行的方向をとった。南方や遠方＝遙かな国もそうしたユートピアに他ならないのである。

「おお精神よ、おまえ自身を疎外せよ―輝け／肉体が抑圧されず、脳髓が分裂していない遠方の嵐や星の力、雲  
 の裂け目から」

《O Geist》50)

精神が自らを疎外することにより脳髓化を脱し、本来の精神への回帰を願うが、そのためには肉体が解放され、  
 脳髓の分裂していない遠方の呼び起こしが必要なのである。遠方はこの詩では「宇宙」、「星」、「海」、「深淵」、「南  
 方」、「彼岸」、「神々のいる場所」と様々に形象を変えつつ、これら全てに共通する《不変》という特性を明らかに  
 する。

「…私は／血に塗れ遠くの、星々の不変を求め闘うのだ」に示される不変性は詩「海と漂泊の伝説」では海は

「不動の空間」として継承される。「個々の事物は／南方の海の夢の中には現われない」(《Meer- und Wander-sagen》66)の句は従って、それ自体が不変である南方の海の夢に生起するものは普遍的性格を持ち、南方は時空のなかで因果律法則に縛られる個物(時間と空間は／地上に打ち建てられた呪詛／：／地上的な形姿は／悲劇的な継起物)が存在・生起する場ではないことを示す。ベンにおいては幸福(訪れよ、おお幸福の展開よ)は地上的法則の下には求められず、「波が永遠に打ち寄せる白い入江」、即ち、遠い南方の海に存在するが、その実現を願う「私はおまえを聞くために沈黙する」というリフレインが最終行の「ああ、私にはおまえが聞こえるーおまえよ」という実現の歓喜と安堵に辿り着くのだ。

失われたもの、未だ実現されないものの回復と実現の願望は精神や自我にも向けられる。「…かつては海のようにどよめき」「太陽のように荒々し」(《O Geist》50) かった精神や自我(…自我／尾を失ったものよ、灼けよ、降臨せよ、星の春となれ)は遠方や南方の力を得て本来の姿と機能を嚴格さのなかで取り戻すことが要求される。

「おお、今こそおまえは深淵を、揺れを、南方を歌え／私は遠さだ、私の／：／彼岸の、星の不変さなのだ…／  
おお、おまえは神々の遠い場所から歌うがよい／いつか、薔薇の鷗の歌を！」

(《O Geist》50)

図式的には南方の海の遠くに遙かな場が存在し、その本来的生成が行なわれる場に接続したいという願望の表出であり、表現であるのだが、むしろ遠さ、遙けさそれ自体が希求の対象となっている。星や岸の形象もその観念から生じるが、ここで場空間に対し、時間の観念を強く付与されたものが青の形象である。ベンは「青色の時間」とそれが包む場所、「これが全てであり、最後の行為だ」(《Blau Stunde》259) だとしてその究極性を示し、幸福との関係を「青色の、暗青色の時間の中での／沈下と危険な幸福を／告げる」(260) とうたう。実際、ベンが青

を「偉大な時間」の色、「唯一の色彩」(E. 1879)とし、青に比べれば他の全ての色彩は「空虚で力を失った戯れ、暗示なき序にすぎない」と言う。青は「幸福」「純粹な体験」の色でもあり、ベンはザンジバルの空やジルテ(H. 1879)の海をその美しい幸福の例証としつつ、幸福との観念的結びつきを強調するが、この二つのアフリカの地名が示すとおり、南方―遠方もまた青の形象に彩られ、成就のために青を必要とする。

「……この永遠で美しい言葉のことを考えてほしい！ 私は理由なく青と云うのではない。それは南方の言葉そのものであり、《リグリア複合観念》の指数であり、巨大な《沸騰する価値》を持ち、《関係性の突破》への主要な手段であり、その後自己発火、つまり《死の烽火》が始まるのだ。あの《黝充血》の秩序に自らを組み込むためにそれに向けてあの《遙かな国》は流れゆくのだ……」(H. 1879)

即ち、ここで青は法則性に縛られた地上的な関係性を突き破る起爆剤的背景として作用することがわかる。烽火は変革のさきがけを象徴するが、脳髓化した現代文明を破壊した後遙かな国に合図を送る青の役割をも示している。青は遠方や南方のように遙かな場所にあるのではなく、此岸に現われ、彼岸へと結ぶ形象なのである。

一方、充血は芸術・創造の過程プロセスの起動的力と状態を表わすベンの医学用語だが、アルフレート・フレヒトハイムに捧げた詩(「充血の国／椰子と貝の海／前世界、柔かな沸騰／様々な形象が押し寄せる」)(Die hyperämischen Reiche (19))が示すように南方、海、前世界という永遠性の空間形成を創造のための破壊という沸騰の形式で結びつける内的凝縮の高まりを意味するものとして充血という語を使用している。第二節において充血の国が「原・森、力の複合／獣の夜と神話の海」であり、古代的神話的要素とその起源を持つことも明確にされている。一九二二年頃から一九三〇年代半ば頃までベンは脳や意識に多重の層の存在を考え、その深層部或いは旧残存部を神話や古代の形象を保存する層として位置づけ、詩的形象を実証科学、自然科学の枠内に関連づけようとした。世界の陶酔的状况は残部脳髓から生じることが第三節で云われるが現代実証科学主義とは対応しない神話的・古代的層に遙かな国からの受信部と現代文明変革の発信部を共存させようとする試みが現代文明に対するベンの姿勢の決定的な特徴をなす。

自我と古代性の脳の部位への位置づけについてザールベルクは「自我の崩壊は大脳皮質の崩壊として解釈され、《下部構造》は脳幹として、退行（《流入》）は原始の巨大な自我の出現として解釈されている」と述べるが、海・遠方や神話の形象と接続する場、即ち、それらの形象が流入してくる場をベンは脳の部位に位置づけることによって科学的根拠、実証性を得ようとしたが、その意味は遙かな国と接続する創造的行為をこうした方法で実在化することにあつたのである。充血もこうした部位の徴候、つまり創造的行為の症状に他ならない。遙かな国、南方との交通や失なわれたものの記憶の通路が同定されたとき、遙かな国と現実世界は創造性においてその通路の濾過を通して一元化される。第三節が示す、「しかし移行は／一元論的目標を持つのだ」という一元化によって、「死も生も—文字も」対立することなく、全てのものに平等に立ち現われ、充血の国からは「いつもそこ」にあり、そして決してないもの（126）がやってきて屹立することになるのだ。第四節冒頭での「存在」への呼びかけが示すように、意味論や機能論の地平から存在論の地平へと詩的形象を移行させる意図をベンは持っているのである。

この存在論的地平はまず言葉の存在として現われる。つまり南方や青の形象から言葉が独立する。

「言葉、言葉—名詞」…言葉が翼を広げさえすれば数千年という時間がその飛翔から滑り落ちる。…精神が持っている歴史と体系のなかでかくも失われてしまったすべての世界はここでその花を咲かせ、ここで夢を開く（1879—80）

言葉に失われた世界が宿するというこの思考は後年、ベンが表現や技巧に集中していく原点となる。詩的形象からのベンの志向の転換・独立は形式への自律性を強く所有し、現実破壊の方向から表現に向かつて実在を形成してゆく大きな契機となる。象徴性の追求は単なる集積であることをやめて表現形式へと昇華される。引用箇所が続けて、絶望や精神の軽率さが存在するのは《概念》が宿る層のみであるとしてその層を原・層と区別する。こうして実証主義、因果律、計測される合理性、法則、計量は、論理的証明が不可能な時間という概念（古代、原始）を打ち出すことにより、即ち「数千年という時間」の回帰のなかで無効化・無意味化され、言葉を中心とすることでヒューマニズムもまた排除されたのである。



この《時間》はさらに神話や神々と結びついて永遠の性質を諸事物に付与する。神々と夢はむしろ不死であり、モータルな人間はそれらの訪れを受け入れるために自らの修業を通して準備・獲得しなければならぬ（「お前の幸福と死とに／夢と予感を置換せよ／…／お前は自らに全てを与えねばならぬ／神々はお前に与えはしない」《Du musst dir alles geben》 132）が、表現と技巧へ向けた自己鍛錬も未だ確立していないこの時期は青の形象に身を委ねることにより超越的時間＝運命と一体化する道が開ける。

「かつて天空に青んだものの中に／お前は自らを呪縛せよ／

…

ああ、既に純粹で／静かでひそやかな道は開かれている／ああ、既に時間は／糸巻き竿の光の中で編まれたあの軽やかな時間が来たのだ／それは歌いながら運命の女神が／糸巻き棒と肘掛けで編んだのだ――

《Du musst dir alles geben》 132)

ヒンデミットが作曲したベン・オラトリオ《Das Unaufrichtige》は時間をテーマとしているが、海も極地も人も時間に収斂してゆくことで、失われしもの、流れ去りゆくものを神々の時間の中で、即ち、夢と運命のなかで、永劫のなかで捉えるのである。星、天空、海が送って寄こす声を聞き、「もしお前が神話と言葉を／飲み干したならばお前は行かねばならぬ」「今は使者に王冠を／夢と神々を戻し与えよ」（《Sich die Sterne, die Fänge》 129）とうたうのは遙かな時と場への出発の決意を示すのであり、自我の崩壊、現実の崩壊（「世界は思考によって破壊された…」《Verlorenes Ich》 215）は遙かな時と場において（「おお、遙かな、確固とした、充実した時間よ／それは失なわれた自我をもちつては包んでいだのだ」 216）救済されるという可能性、いや予定調和的運命を高らかに開示するのだ。

遠方では永遠と不変と創造が燃え尽き、現実世界では咽喉は息絶え、光は砕かれているが、ついに遠方からは

選ばれた人間を差異化する「しるし」が現われる。

「しかし私はひとつのしるしを見る／影の国を越えて／遠方から、国々から／ひとつの大きな、美しい手を／

……

そしてお前は滑り、腰を下すだろう／砂漠に、海べに、／遠方から、遙かなところから／「彼もまた救済するのだ」／私はお前の眼差を知っていた／そして最も深い母胎に／お前は私たちの幸福を／夢を、運命を集める」

《Aus Fernen, Aus Reichem》(111)

ここで遠方や南方、青などの詩的形象がア・プリオリに存在することの意味とそれが辿り着く場所について考察しておかねばならない。即ち、あるテーゼや觀念、形象を論理的思考や弁証法的思考によってではなく、作者がア・プリオリに存在するものとして前提し、その前提を讀者に承認させることは、いわば論理の崩壊であり、ベンの用語で言えば「前・論理性」であるということである。

言語・詩作品が共同体を解消、破壊する役割を果たし、共同体を顛覆する契機に自己を同一化する根底に根源的な、前・論理的なリズムを見出すクリステヴァは、前・論理性、即ち、論理の崩壊から生み出されるものは無限化された文を産出する原記号的装置へと供給されるという。さらに言語の次元において、部分から全体の構築に向かうのではなく、全体の無限化から部分の意味の産出のプロセスが指摘される。

「言表主体の運動態は、前・論理的なリズムから、あるいは論理の崩壊から、ひとつの多論理を作り出して、別の文章法を要求する。……部分から出発して全体に到達するのではない。全体を無限化〔無数化〕することに、初めて、初めて各部分の有限な意味に到達するのである。」(傍点及び括弧、クリステヴァ)

この指摘はソレルスの小説『H』の句読点のない文(無限化された文)の論理や意味について言及されたものだが、文という単位の制約を離れ、これを思考の無限化に読み替えたとき、ベンの詩的形象がベンの思考世界のなか

で持つ意味の解説に新しい次元を開いてくれる。つまり、前述したようにベンの遠方、南方、深淵などの原記号装置の場が様々な要素の統合や分解の論理的な作業の結果として辿り着いたものではなく、まず、それらの形象がア・プリオリに存在し、次にそれがベンの世界の全体像を形成することによってまさにトートロジックに成立していたのであり、また逆に、ベンの成果が全体として保証され、さらにこの保証がまたベンの世界の全体性をより強鞏にしてゆくという反復のプロセスによってベンの世界は無限化されるのである。現実世界に対するベンの批判はこうしたア・プリオリな前提、一種の仮定にすぎないものを積み重ねて論理的に保証された正当性の外観（見かけ）を持った前・論理的世界からなされるのであり、あらゆる論理的、合理的なものの価値がその前・論理性、前・合理性によって同定されてゆくというベンの思考状況がここに成立するのである。この前・論理性は科学、或いは、擬似科学を証明として援用してゆくと、やがて偽・論理性として変質し、ひとつのドグマとなってゆく。

ベンの前・論理性への志向はあらゆる調和的なものの安易さを切り捨てるという役割を果たす一方で、自らを安易に普遍化し、それゆえにベンには思考の苦闘が、従って苦闘によって生み出されてくるべき精神は欠落してゆくのである。この欠落こそがベンのナチズム信奉に至る原因のひとつであることは充分、注意されねばならない。

### (c) 陶酔と弛み

エロス、腐肉、破壊衝動と海、夢、星などの詩的形象の距離を埋めるものが《陶酔》である。この陶酔は南方・古代ギリシアの形象と結びつき、ディオニソスの陶酔として現われ、破壊・混沌カオス―創造を伴う。

詩の成立についてベンは「しばしば二つの潮が高まり、ひとつの夢となる」という自己の文を引用して、「夢が完全であり、激しいと同時に適切に表現されるとき詩が生じる」(D. 1910)と解説し、詩の淵源であり、様々な形象・比喩の母胎である夢に対し、《ディオニソス・陶酔》の機能が世界の既成価値や体系の関係を切断し、現実を破壊し、詩作のための自由を確保することにあることを述べる。

「我々はまた、体系的な形で《リグリア複合観念》コンプレックスという奇妙な概念に出会うが、それはその《沸騰的価値》、即ち、まさに陶酔価値において試されるもので、この複合観念を通して詩作に自由の場を創造する為、《関係性の

突破》、つまり現実崩壊が完遂されうるのだ。」(D. 1912)

青の形象に関して言及されたこととほぼ同様なことが述べられているが、ここでの《ディオニソス・陶酔》は詩の成立の土壌であり起爆剤であって、創造的行為のための現実崩壊を自ら積極的にに行う点において青の形象と異なる意味をもつ。

《ディオニソス・陶酔》は生の横溢、本能の現実であり、破壊と再統合の力として捉えられるが、ブラウンは、「人間の自我はディオニソスの現実に直面しなければならぬ。その先にはしたがって、自己転換の大きな仕事待ち受けている。なぜならばニーチェがアポロは自己意識を保持し、ディオニソスはそれを破壊すると言ったことは正しかったからである。自我の構成がアポロ的である以上は、ディオニソスの経験はただ自我の崩壊によってのみ贈られる」として、破壊・カオスから創造へという過程が自我にも妥当することをアポロとの対比で指摘する。

ベンは洪水や恍惚ユンストラクシのなかで「生産的なもの」を生成するこの変成状態の自我を抒情的自我と名付け、一突破された自我」と規定する(D. 1912)。こうして抒情的自我において、誕生、血という爆破・破壊の系と、逆行し呼び覚ます集中の系とが陶酔のなかで生成の形式へと形成される、ことがわかる。

「抒情的自我は：爆破する形と集合する形、つまり血に満ちた形と静謐な形をとって体験される。陶酔の方法については両者とも知っている。」(D. 1911)

二項対立の特徴をもつこの二つの形式はそのままディオニソスとアポロに対応しているが、また硬直さを解決する弛み、のびやかさ、解放に対し、脳髓・理性・意識による硬直さ、凝固にも明確に対応している。

地震により二度、壊滅した豊かで自由なクレタ美術を想起させる詩「クレタの壺」において、使用効率という近代的規準である道具の目的や機能を免れた「道具ならぬもの」クレタの壺を契機として《弛み》がうたわれる。

「ゆるやかにほどけてゆく。自由な生誕が完成される。ゆるく光を放ちながら獣たち、岩、それに明るく目

的を免れたもの／つまり董の編模様。生暖かい頭蓋が／牧場で血にまみれつつ／

……

凝固と額に打ちつける波／殲滅の烙印に抗して／生長と意識の脳髓に抗して／灼けるような深いバツカスの祭り／…」

《Kretische Vase》(48)

牧場という平面性は海や平地に連なる形象であり、そこで血・誕生がゆるやかな光の下でゆるやかな解放として形成されるが、また同時に頭蓋(ベンの使用法では脳髓と同義)の溶解と崩壊、凝固、額(脳髓と同義)、意識＝脳髓、生長(実証科学主義時代における進歩の思想、信仰)といった滅亡しほの徴からの解放であることも明示される。勿論、この弛み、ゆるやかさは遠方・古代ギリシアを常に場という空間として付与されるだけでなく、解放そのものという行為としてベンの創造原理の一過程を担うのである。

血と花の形象を基軸とし、性と肉体エロスへの渾仰のなかでデフォルメされた出産をうたう詩「地下鉄道」にも《弛み》が現われ、脳髓からの解放の道を象徴的に示す。出産と性セックス、愛する男と嬰兒が緊張感を以って重ね合わせられる。血の色、花の色彩と匂いの豊饒が出産と性の形態と表現的に飽和してゆくという前半の緊張感は後半で一気に解放される。

「重々しく神をぶら下げた、哀れな脳髓犬／俺は額にはもううんざりだ／…

……

とても弛み解放されて。かくも疲れ果て。私はさまよい出たい。／血の気もなくさまざまな道を…／影と大洪水。遠い幸福とは――遙か海の深い青の中へ救済しつつ死ぬこと」

《Untergrundbahn》(31)

ヴェラスホフが言うように地下鉄道は二重の意味、即ち鉄道と意識下への潜行の意味を持つのだとするならば、解剖学的で粘液質的な前半の描写は対象に従属した意識下の投影であり、後半は対象から解放された内的精神世界への道を開くものとなる。その地点に弛みと陶酔が要請され、現出するのである。

定義上、一定の原因から一定の結果しか生じない因果律や法則主義はベンにとってこの硬直と凝固に他ならず、それを受け入れる知性も凝固、硬直した脳髓・意識に他ならないのであり、生の感情を排し、創造性を破壊するものであった。従って《予測不可能性》を創造原理とするベンにとって法則主義と脳髓からの解放と弛みは必然的かつ不可欠な要請であったといえる。この《弛み》を受容しない思考、即ち、ベンに誤った理解によるが進歩の方向を定めたダーウィン主義<sup>(28)</sup>、実験・観察という個別的事実の証明によってのみ認定してゆく実証主義、因果律・法則主義、帰納法はベンの創造を原理において妨げるものなのである。創造は充血の過程を経てこの弛みと陶酔の下で醸成されるが、その後を訪れるものが《幸福》という形象なのである。

#### (d) 幸福と退行

脳髓化する自我（「嘔吐する―自我…」傍点 ベン）《Der Psychiater》(399)、肉塊としての人間（「脳を喰い尽くされた腐肉」《Ikarus》(46)への嫌悪、法則主義と享楽主義批判、「人間、つまり意識の囚人、自我の口に楔で締めつけられ」<sup>(29)</sup>）た人間は樂園追放を受ける宿命にある（「人間は創造の失敗した仕事である。人間は樂園から追放され」<sup>(30)</sup>）。現代社会と人間のこの負の特性を救済する道としてまず攻撃的表現、加虐性による肉体（人間性）と自我（現代思想・文明の受容器、代理物）の死と破壊、誕生の苦痛の象徴としての血と再生、空間としては遠方・南方・海・岸・星などにその象徴性を与えた遙かなる場<sup>トポス</sup>からの交信、さらに時間性として感覚と精神をつなぐ色、青という時間の包み込み、古代性への憧憬、内面における陶酔と弛みが導入され、これらによりベンの意図し、理想とする人間と創造性の回復、そしてこれを運命に必然性とする<sup>(31)</sup>ことが意図され、試みられる。《幸福》の形象とはこれらが全て収斂する場所なのである。

「今、海浜から、砂洲から／オレンジの海から／深く陶酔したまま」「蝶<sup>スフィンクサ</sup>たち」<sup>(32)</sup>がもたらすものは運命、即

ち、―「ばらと光に包まれて」やってくる「最後の幸福」である（『Du musst dir alles geben』133）。しかし、また、この幸福は退行性と結びついている。詩「イカルス」に触れて、ヴェラスホフは次のように述べる。

「幸福は本古的な性格を持ち、なお前・意識的、植物的存在とより一層深く結ばれている。ベンにおいては幸福の体験はいつも退行と結びつけられている。」<sup>(31)</sup>

退行とは太古に向けたベクトル、根源への志向、始まりへ向けられた視線であり、それら全ての行為にはユートピアからの抽出とユートピアへの還元を見出すことができる。

「後方に向けた憧憬と根源を理想化することは太古的である。楽園の観念、黄金時代の伝説は変容された古代のこの伝統の神話的始まりである。…遠くの、神話的伝説的に想像上の過去はそれを夢見る現在の内で作用する。過去は眼前にあるものへの不満を呼び醒し、ユートピアの機能を持つ。」<sup>(32)</sup>

プロッホは『ユートピアの起源』において「元型」の形象によってそれを示したが、ここでは始源の理想化と眼前性（現実世界）への不幸の成立順序が問題となってくる。即ち、予め自己の内部に存在していた始源への理想化が現実世界への不満を惹起する場合、全てはユートピアへ還元される危険性があり、またユートピアの観念は常にその危険性を内包している。ベンはまさにその危険性を体現したのである。

#### 四 歴史と文明のなかのベンンの詩と思想

ベンの捉え方によれば、一九世紀後半から二〇世紀初頭のドイツの思想的、社会的状況は巧利主義と実証科学の影響を受けた市民階級の肥大とそれに伴う芸術的創造の沈下を特徴とした。この巧利主義的、実証科学的思考は消費衝動・享楽主義的文明・水平的思考・平均人間・俗物性といった系列の表現で与えられ、一方、芸術的創造は南方・遠方・神話・運命などの形象のチームで表現されることはすでに述べたが、巧利主義の土壌を持ち、神話等から離れ、かつブルジョワイデオロギーが重大な問題を抱えていた時代という視点に立つとき、一九世紀のイギリ

スはベンの時代のドイツと同じ背景の下に同じ問題を抱えていたことがわかる。一八三〇年代にコウルリッジとベンサムを繋いだミルーベンの思想的批判の対象であった―がその好例となるイギリス経験論がイデオロギーにまで成熟しなかったために、「ロマン主義的ヒューマニズムの豊かな象徴に頼らざるを得ず、封建主義の社会のモデルを形而上的裏打ちとし」たヴィクトリア朝の資本主義の時代には「伝統的階層の有機的知識層への参入同化」がその批判思想的特徴となる。<sup>(33)</sup> そうした時代背景の下でブルジョワ国家の思想的な新しい要請に応える者としてイーゲルトンが挙げるマシュー・アーノルドの「文化を擁護しブルジョワ俗物根性を糾弾し続け」、機械文明、物質文明に対立するものとして精神的文化を据え、文学や詩の使命を神話化、運命化する態度はベンのそれと重なる。

アーノルドは詩の崇高な使命の完遂が民族的支柱となり、生の意味や精神の存在は宗教や科学ではなく詩―文学の責務であると述べて『The Study of Poetry』、分析に代えて感情を持ち出し、詩を「イデオロギー的に危機に瀕した社会にとって、最後の切札」としたのである。

しかし、実証主義者のフレデリック・ハリソンがアーノルドの批評を調和や直観、永遠の発展のみがあって体系、論理、円熟がないと批判したように、彼の批評にはある種の普遍的イメージ、象徴言語に依拠し、その内実が規定されえず、不分明であるという欠陥の性格があった。イーゲルトンはそれを次のように分析する。

「美的、歴史的脈絡から切り放された一握りの詩的イメージに共通して存在するとされる、何やら得体の知れぬ響きに直感的に反応することを、靈験あらたかにも、文芸評価の絶対的基準「試金石」とするアーノルドの文芸批評のありようは、理論的に明らかに無理なところがあった。<sup>(36)</sup>」

アーノルドの批評のこうした性格はベンにも当てはまり、従ってまた、文芸を文明や現代という語に置換すればこの批判はそのままベンに妥当する。

現代に対する自然科学者の視点から行なわれたベンの分析と批判は反ヒューマニズムの標榜の下に現代社会の破壊を要求したが、その後の再構築は運命、海、南方、遠方などの詩的形象に全面的に依拠する。喪失され、回復されるべきものという性格を共通にもつためにトートロジーに陥りかねないこれらの詩的形象には明確な体系や論理



が与えられていない。

『イータカ』においては実証主義、科学主義及びそれを思考基盤にした一九世紀から現代の世界をブルジョワ時代Ⅱ合理的因果律的思考の時代としておさまりの批判がなされるが、この劇の演劇的叙事的な構成上の欠陥の指摘とともにカウフマンはベン<sup>(37)</sup>の非歴史的理解と彼の非歴史的思考の形象、つまり現代に対する自然発生的嫌悪感を非合理主義に一般化する傾向、全てを内的イメージに還元・解消させてしまう態度に対して『イータカ』を次のように批判する。

「…全体は、たんに内的で美的な生の理想像のイメージ、それも概念によってではなく、抒情的な感嘆詩でとらえられるようなイメージになっていくのである。最後にあらわれるのは：ディオニソス的な南方の幻想であり、イータカである。それは：歴史とはかかわりのない幻想的な原始の風景であって、…内的にしか感じられない生である。…孤立した自己が、その内部からよびだし、現実<sup>(38)</sup>にさからい、現実からのがれ、現実<sup>(39)</sup>に耐えるためによびだした断片的イメージと回想と夢からなりたっているにすぎないものだ。」

「…その描写は中断されて、内面の自伝の断片的な記述となり、文化批判、文明批判、科学批判、進歩批判のエッセイ風の解説になってしまう。それも情緒的な調子のもので、味気のない退屈な因果律的思考を…原始的感情にかえたい、という憧れにささえられたものなのである。このような散文作品は、すべて陶酔的、抒情的幻想に解消されてしまう。…古代の地中海がよびだされる。作者は現実<sup>(40)</sup>からにげだし、現実<sup>(41)</sup>を抒情的・修辭的にけしきってしまうのである。」

カウフマンのこの『イータカ』批判はベンに対する本質的な批判であり、また、『イータカ』にベンの思考の本質的要素が全て包含されているとするカウフマンもこの批判の意義を明確に意識している。詩的形象が非歴史的であり、個人の内的觀念に由来し、内的觀念をしか表現しえないとき、それは現実に対する主体的な批判能力を失う。これらの詩的形象は論理性、体系的根拠やその定義を欠落させているが、まさにそれ故、万能の呪文のように繰り返し登場するのである。つまり、「…内容的にはなんら規定のできない「様式」や「フォーム」だけが美的理

想としての「こされ」、従って、「孤立化、反ヒューマニズム、非歴史主義、非論理性などは、そのあと四十年間、一貫して保持され」、<sup>(38)</sup>機会のある毎に反復されるのである。

非歴史性と非論理性、内実的定義の欠如、全てをユートピア的<sup>ユートピア</sup>場に還元する点と並んで、出現の唐突さと運命を担い、全てを救済し、解決するという超越性という点でデウス・エクソ・マキーナとしてベン<sup>ベン</sup>の詩的形象は使用されている。問題は体系や論理から孤立したこれらの詩的形象が意味空間に付与され、それら以外に意味や本質を成すものが存在しないとき—その場合、詩的形象は超越的で絶対的本質となる—詩的形象は神託の機能を果たすに他ならなくなる。こうしてベンは超越的神託を抱えることにより必然的にナチズムに近づく。この超越性や絶対性を非歴史性とみなすとき、ファシズムとそれらの関係の把握が可能となる。

「人間の歴史における発展の概念を否定して、そのかわりに神話的、生物学的、地理学的な擬似歴史がもちだされる。その結果が、ペンをファシズムの人種神話との運命的な結びつきにむかわしめることになったのである。」<sup>(39)</sup>

一般的に言えば、現実が崩壊した後に孤立した主体が打ち立てようとする創造原理自体が内的幻想であるという傾向は表現主義抒情詩の特徴でもある。ラスカー＝シューラーの詩集『七日目』（一九〇五年）において情緒的にのみ規定された重い闇、孤独、憧れを媒介として内面の苦悩と外界世界の状況を一致させる手法、つまり内面の普遍化、客観化とその危険性は次のように指摘される。

「このような個人的状況の世界状況への内発的な普遍化は、そのあと表現主義抒情詩の特徴となる。…主観的にかんじられたことが、ちよくせつ時代にゆだねられ、客観的なものと称されることになる。…比喻によってたとえられたものが、比喻からきえてしまったあと、比喻そのものが客観性の外観を呈する。…主体は周辺世界と自己との関係をただしく判断することをにげ、けつきよくこの傾向のためにどのような判断も回避されて、主体と周辺世界との硬直した対立関係が…表現される。」<sup>(40)</sup>

自己の感覚が時代の本質を代理すると考え、絶対的暗喩として現われた比喻を現実そのものとみなすことによっ

て世界に新しい思考を注入したり、新しい地平を開くのではなく、世界と自己との関係への厳密な考察を経ないまま、自己の絶対的内面世界を現実世界の解法として対峙させるのである。むしろこの解法は幻想にすぎないが、幻想はこの関係性のなかでは必然的に現実へとすりかえられてゆく。ベンにとって現実崩壊、自我崩壊は厳密な論理や体系の下で新たな自我の構築には向かわずに、自己変革をしない旧来の自我が遠方や南方、運命などの詩的形象をうたいつつ、それを別の世界との媒介ではなく、それ自身を新しい絶対的な世界として現前させ、全てをそこに溶解させる。次の段階でその絶対性は本質的特徴と見なされ、逆に全てがそこに還元され、そこから抽出されることになる。旧来の自我がその自我自身によって産出された幻想を事実と信じこむ過程がそこに見られるのである。

現代に対する不満と嫌悪、及び現代によって歪められたものを元に戻し、失われたものを回復したいという観念がベンの自己の内面世界の形象に一元に戻す、回復する、という表現が示すように「《本来の》」という属性を与えらる。我々は旧来の自我のもつこうしたスタンスと幻想への傾きをも射程に入れて《本来の》という形容を用いたが、まさにこの形容が示すように、ユートピア的、或いは、プラトニズム的なアイデアの仮定は決してその本質が析出することのない自己循環を続け、自らの幻想を信じ続ける自己偽瞞の原因となるのであった。

「ベンは、かれが「本来の」現実とよぶところの人間の精神的・心的内面世界を、ことばをとおして「喚起」しようとして、かれにとつては「仮りの姿」にすぎない外的な物質世界を、背後におしやり、ついには視界からけしきってしまふ。」<sup>(4)</sup>

カウフマンは絶対的内面性を自己と世界との芸術的關係構築の障害とするが、我々はさらにベンが絶対的なるものを表現する方法として概念の回避やイメージの累積のみを使用することによって、秘儀性を付与し、《徴》を理解しない一般の人間（平均人間）を排除していったことを認識せねばならない。「平均人間」と選ばれた者との排他的なこの区別が政治・政策上のナチズム賛同への基盤となった。ナチスの人種政策に異和感や警戒を覚え、短編『遺産』において自己が純血のアーリア人種である証明をノンシャラントに述べ立てる（D. 1885-1895）ベンの精神構造には、こうした内面の絶対化、絶対性と自己との陶酔の一体感を通しての自己の絶対化、差異化が大

きく作用したのである。他の諸対象に対して絶対化を行なうはずの詩的形相が自己自身を絶対化したのである。《失なわれたもの》という形相もそれ自体の本質や価値とは無関係にまさに失なわれたという觀念によって存在価値と意味をもつのであり、回復されねばならないという命題と強迫觀念に似た衝動を駆動力として思考内で内的循環をなすのである。これを既に見たベンの詩作品における原罪―樂園追放―樂園回復というキリスト教的図式と重ね合わせることはむろん可能かつ正当であり、そこに牧師である父親の意志に背いて医学の道を選んだベンの意識下の葛藤がひとつのテーマとして展開されうるが、それはここでの主題ではない。むしろ、この幻想的内面性の絶対化を実証科学である医学において根拠づけようとしたことによってこの幻想の循環を強固にした点に注意を促しておく。

ベンは意識を支配する脳髓に対し、本能―創造性を保持する大脳皮質などの脳の辺縁系を措定することによって詩的形相との交通の場を医学的に論拠づけようとした。即ち、ベンは己れの主観的形相や世界に解剖学、医学を持ち込み、そこに位置づけることにより客観性を付与しようとして試み、かつそれ自体論証されないその客観性（の見かけ）を自ら信じ込んだ。しかし、既に述べたように、現代文明社会における実験・観察という合理的、実証主義的現実把握の方法を批判することから出発し、その批判に自己の姿勢の立脚点を置き、己れの世界観を擁立したベンが合理性や実証主義的把握方法への信頼を欠如させたまま、まさに脳髓―意識が構築し、受容した実証主義、観察と実験を方法論とした医学、解剖学、生理学によって詩的形相の客観性を保証しようとしたその行為においてベンの論理性と世界観自体の体系は無効となり、その信頼性は失われるのである。現実世界に対峙すべき内的世界の存在基盤、論拠基盤も同時に失われ、彼の文化批判、科学批判は実際の批判力として機能せず、意味を失った叫びとなった。表現主義的詩として意味をもっていた、荒々しい生命的な叫び、罵倒、或いは、繰り返いは変質してしまつたのである。

自我崩壊も現実崩壊も結局は、コップの中の嵐にすぎなかった。父との確執、そして第一次大戦が一見、与えた

かに見える《現実によって惹起された対立》という図式は、実際はベンの世界形成の本質たり得ず、ベンの詩的形象形成はそれに先だつア・プリオリなもの（超越的なもの）であり、それを無限のエネルギーとして、孤立した自己循環だけが廻り続けることになる。彼が喜びを以ってナチスに接近するのち、「…抒情詩人ベンが一九三四年以降、彼の《内的亡命》に基づいて、…己れの現実との関係を一步一步放棄しなければならなくなる」<sup>(19)</sup>のもまさにこうしたプロセスのなかで必然的に生起したことなのである。

### 《註》

ゴットフリート・ベンの作品引用の所在、方法、作品の略号及び参照文献の表示方法は本論の(一)と同様である。尚、《註》の番号は続き番号としている。

(19) 一九三三年四月二四日のラジオ講演「新しい国家と知識人」に明示されるようにこの頃顕著になったナチズムの魅惑とその後自己反省を経て、ベンは芸術創造に限定した集中と自己鍛錬、〈表現〉や〈技巧〉を創造主体としての自己の拠点とするが、これらの形象は実はナチズムへの呪縛に寄与した。即ち、「新しい国家と知識人」においてナチスを歴史的必然の過程に組入れ、「全く前進的な、秩序形成的なポジティブな国家、近代的国家の傾向と理念」を見、この「真に新しい歴史的運動」に「偉大」になろうという衝動、「絶対的なもの」への努力、「必然的思考」「世界の超地上的（天上的）力」という価値を与え、その重要性と必然性を説く。○Der neue Staat und die Intellektuellen(1004-1013) 海 遠方という形態をとりつつ、その本質は志向としての超地上性、絶対性、必然性であり、この共通性がナチズム理論への同化と讃美を容易にさせた。

(20) W. Lennig: a.o., S.56

(21) O. Sahlberg: a.o., S.25

(22) 周知のように表現主義の画家達はアフリカやポリネシアの原始プリミティブ芸術カオスの混沌、エネルギー溢れる生命力に大いに影響を受けた。

(23) O. Sahlberg: a.o., S.27

(24) Julia Kristeva: Polylogue. Edition du Seuil, 1977 邦訳 ジュリア・クリステヴァ『ポリログ』赤羽研三、足

立和浩、北山研三、佐々木滋子、沢崎浩平、高橋 純、西川直子訳 白水社 一九八六年 一五九〜一六一頁

(25) N・O・ブラウン 前掲書 一八一頁

- (26) 例えば同時期の詩、『Ikarus』では脳髓からの解放、生成と生起の惹起に牧場が援助的な場の機能を果すことがよくわかる。
- 「おお、正午よ、熱い干草で私の脳髓を痺れさせ／牧場や平らな土地や牧人に等しくする／…／おお、お前、遙かにアーチをなすものよ／生成と生起の／呪いと恨みのうえに静かに翼を拡げ／私の眼を脳髓から／放つがよい」(5)
- (27) これに関しては拙稿「深淵からの世界の誕生」立正大学教養部紀要 第二十七号 一九九三年 参照
- (28) ダーウィン主義に関しては拙稿「ダーウィニズム批判に見るベン思想」立正大学教養部紀要 第二十五号 一九九二年 参照
- (29) D. Wellershoff: a.a.O., S.100
- (30) D. Wellershoff: a.a.O., S.100
- (31) D. Wellershoff: a.a.O., S.100-101
- (32) D. Wellershoff: a.a.O., S.103
- (33) Terry Eagleton: Criticism and Ideology. New Left Books Ltd. London 1976. 邦訳 T・イーグルトン 『文芸批評とイデオロギー』高田康成訳 岩波書店 一九八〇年 一五〇頁
- (34) T・イーグルトン 前掲書 一五二頁
- (35) T・イーグルトン 前掲書 一五六頁
- (36) T・イーグルトン 前掲書 一五七頁
- (37) Hans Kaufmann: Krisen und Wandlungen der deutschen Literatur von Wedekind bis Feuchtwanger. Aufbau-Verlag. Berlin und Weimar 1966. H・カウフマン 『ドイツ現代文学批判―危機と変革』溝辺敬一訳 ミネルヴァ書房 一九七〇年 一一六頁及び一一八頁
- (38) H・カウフマン 前掲書 一一六頁
- (39) H・カウフマン 前掲書 一一六頁
- (40) H・カウフマン 前掲書 一二二頁
- (41) H・カウフマン 前掲書 一一八頁
- (42) Jürgen Schröder: Gottfried Benn. Poesie und Sozialisation. W. Kohlhammer. Stuttgart, 1978, S.67